

2012 年度報告書（研究員）

氏 名	松井 智子
職 位	研究員
<p>研究概要</p> <p>現代の国際移動労働および出身地への帰還という経験が、移動する女性たちの親密圏と公共圏をどのように変化させているか。本研究では、北タイの女性移民を事例に、この問題をフィールドワークから実証的に明らかにすることを課題として取り組んできた。</p> <p>本年度は、2010 年度・2011 年度に行なった二度のフィールドワークに基づく研究を総合し、その調査結果を再検討した。2010 年度は、「越境するタイ人女性移民の親密圏と公共圏の生成——ネットワーク形成の実践を中心に」と題して、タイ人女性移民の国際移動と帰還がどのような社会的ネットワークの網の目の中で実践されているかを検討した。2011 年度は、「帰還移民の親密圏の再編成——タイ人女性移民を事例として」と題して、帰還移民の親密圏の有り様に焦点を絞って検討した。</p> <p>上記の調査の結果を総合すると、次のようなことが言える。1990 年代に来日し、その後出身地である北タイの農村に帰還した女性は、日本・タイの間に広がる家族との関係や、移民仲間との弱い紐帯を維持したり再構築したりしながら、その緩やかな社会的ネットワークを、職や経済的支援、再移動、国際結婚等のチャンス獲得のために利用している。こうしたネットワークが、雇用の少ない農村において生存の選択肢をグローバルに広げ、国境を超えたライフスタイルを想像し実践するための下支えとなっている。</p> <p>これを親密圏／公共圏という言葉で整理し直すと、次のように言える。</p> <p>1990 年代に来日し、その後出身地である農村に帰還した女性たちは、その後、元の「家族」や「村共同体」に速やかに同化することにはならなかった。彼女たちは、日本に定住したキョウダイやパートナーとの関係を継続し、時に村で同居する「家族」以上に親密な関係を再構築している。それに伴い、村で親密な関係にある人々との関係のあり方も変容し、その結果、性愛・結婚・生殖・生計がまるで一致しない親密圏が成立している——それらが一致する「家族」が見つからない——ように見える。</p> <p>公共圏についていえば、チェンライのケースでは、国際移民・帰還移民を支援する NGO の存在が、帰還移民同士の連帯の場を提供したことの影響が大きい。そこで個々人の移住経験を語り、分かち合うことによって、自らをエンパワーメントし、移住者のネットワークと連帯の中に自らを位置づけるようになっていく。しかし同時にそのネットワークは、親族や友人関係と重複するものであり、公共圏と親密圏が交差する場として成立していた。</p>	
<p>業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）</p> <p>その他</p> <p>平成24年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援）採択（研究課題名「女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に」）</p>	